

異文化看護 (Transcultural Nursing) の視点を取り入れた看護英語教材の開発

山本淳子¹⁾ 加固正子²⁾

1) 新潟県立看護大学 (看護基盤科学), 2) 新潟県立看護大学 (小児看護学)

Development of English Teaching Material on Transcultural Nursing

Junko Yamamoto¹⁾, Masako Kako²⁾

1) Basic Nursing Science, Niigata College of Nursing

2) Child Health Nursing, Niigata College of Nursing

キーワード：異文化看護 (Transcultural Nursing), ESP(English for Specific Purposes),
英語教材 (English teaching material)

抄録

特別な目的のための英語を大学教育に取り入れる目的は将来の職場で役立つ英語力を身につけさせることである。看護職を目指す看護大学の学生もこのような力が求められている。インターネット時代を生きる看護大学の学部生や大学院生にとって、英語論文・洋雑誌を読みこなす力は、ますます欠かせない。従来医療系学生のために書かれた英語読解用教科書は、医療・健康に関するエッセイ・読み物でまとめられたものが主であり必ずしも、特別な目的のための英語 (ESP) を意図して著されているとは限らないと考える。本研究では英語教員が看護系教授と協力することで、専門的な要素を取り入れた教材開発を行う。看護の専門分野として、英語教育と共通点を持つ異文化看護に焦点を当てた。英語読解を選択・履修する学生は2年生で、基礎的な読解力をつけることを目的とした English for General Nursing Purposes(EGNP)を実践すべきであると考えた。この教材で基礎的読解力が伸び異文化看護に関する興味・関心が高まる事を期待する。

研究目的

看護系の4年制大学の数は、'90年代に11校であったのが、この10年間で10倍以上の、119校となっている、またその半数以上で大学院課程が提供されており、さらに整備されていくことが予測される(成沢, 2003)。この看護学生の高学歴化の中で、国際社会にも英語で対応できる専門家を育てることは社会のニーズであると考えられる。とくに看護職のような専門家を目指して入学してくる学生たちは特に専門科目に対する学習意欲が極めて高い(渡邊, 1998 山本, 2003) ESP—English for Specific Purposes (特別な目的のための英語)の視点をふまえ、実践的英語力養成のため、また異なる文化を背景に持つクライアントを理解するために、異文化看護の視点を取り入れた教材を開発することを目的とした。

従来の英語教員によって作成された英語教材は、一般人の視点から、知識の及ぶ範囲で一般的な医学・看護場面での典型的な会話、現場で用いられる語彙、専門用語などを盛り込んだものが中心となっている。本研究では、看護系教授の知識・経験・15年度のアメリカ研修で得られた資料・インタビュー結果を生かして、異文化間の臨床現場における多様性を学ぶ

ための看護英語の教科書作成を目指した。

研究方法

異文化看護について深く学べる教材を作成するに当たりまずアメリカで出版された異文化看護の教科書を取り寄せその内容を分析し以下の観点を選択の基準として文献研究を行った。

- ・ 学生の英語力のレベルにあっている。
- ・ 基本的な異文化看護の知識が学べる構成になっている。
- ・ わかりやすいケーススタディが多く含まれている
- ・ 日本も含めアジアの国々の文化も多く取り扱っていて、世界における多様性だけでなく、日本国内でも存在する文化の多様性を意識することができる

この項目に当てはまる教材を選択してその教材を15年度の学生に対して使用しながら、内容・構成に改善・調整を加えパイロット版を製作した。

結果

1 教材の妥当性

上記のそれぞれの項目について15年度の文献研究で購入した6冊の異文化看護の教科書の内容を照らし合わせてみた。比較検討した結果、*Culture and the Clinical Encounter* (Gropper, 1996) を選択した。その理由は以下の通りである。

1-1) 学生の英語力レベル

この教科書で取り上げられているケーススタディは平均約160語、それぞれのケーススタディの解説が120語と、全体的に簡潔にまとめられており、洋書に慣れていない学生には無理がないと考えられる。難解な語彙・表現はなく英語を母語としない学生に歯が立たない内容ではない。

1-2) 構成

・イントロダクション(10ページ)・ケーススタディと設問(86ページ)・設問の解説(48ページ)・まとめ(12ページ)と4つのパートに分けられており、解説に多くのページが割かれているため初めて異文化看護に触れる学生にはわかりやすい構成になっている。解説のしかたが工夫されている。それぞれのケーススタディで取り上げられた問題の対応が4種類あげられており、その中から最も適切なものを選ばせるようになっているため、考える力が求められる。解答が解説にもなっており、間違っている場合はなぜ間違ったのかについても解説があるので、使いやすい。

1-3) ケーススタディ

実際にあった出来事をもとにしたケーススタディが中心となっているので状況判断がしやすく問題の核心をつかみやすい。医療現場が舞台となっているので看護職を目指す学生にとっても英語読解に対する動機付けが高まる。また、アメリカで出版された本であるが、日本やアジアの国々も取り扱われている。

この教材を一年かけて読み、理解度を見るためにそれぞれのケーススタディを読んだ後、サマリーと感想を書いてもらったほか、パイロット版作成の参考にするため授業中のディスカッションの内容・学生の意見・素材に対する意見を集約した。

また全授業終了時に、印象に残ったケーススタディ(二つまで)とその理由を書いてもらい、これもパイロット版作成の参考とした(図1)。

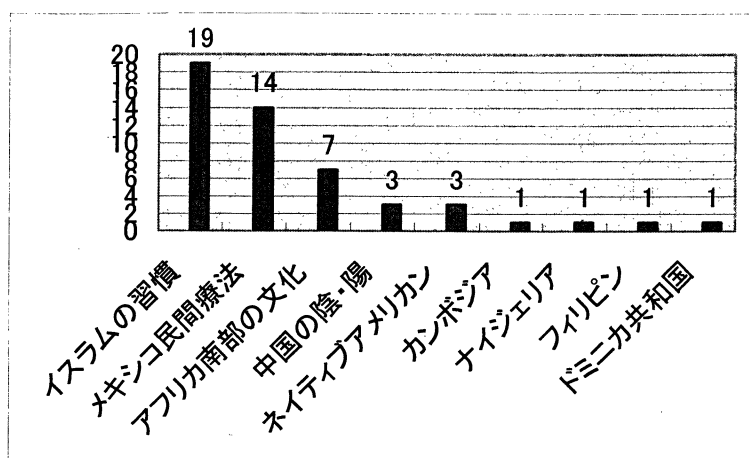


図1. 学生の印象に残ったケーススタディの内容 (国)

この教材を使ったことで異文化看護についての知識が高まったかどうかを知るために、アメリカ研修時に、異文化看護担当教授から紹介された異文化看護理解度テストを利用した。これをこの授業を選択していない 28 人の学生（英語表現法会話を選択）15 年度に英語表現法読解を選択した 30 人に取り組みてもらいその正解数の平均の差を調べた。2 標本 t 検定で比べた結果、有意水準 5% で平均値に差が出た ($P < 0.05$) (表 1)。

表 1. 異文化看護理解度テスト 平均点の差

	N	平均値	標準誤差	標準偏差
英会話選択学生	28	14.4643	0.400007	2.07850
異文化看護選択学生	30	16.0667	0.544425	2.93182

この教科書ははじめて異文化看護を学習する学生にとって有効であったと考えられる。この教材のレベル（語彙・レベル）や基本的構成・学生にとって印象に残ったケーススタディなどを参考にして日本人学生向けに教材を作成することとした。パイロット版作成に当たり改善すべきところをリストアップした。

2 教材の問題点

2-1) 文化の相違を強調しすぎるケーススタディが散見される。異文化看護において、文化を強調しすぎることは強調しすぎないことと同じほど危険なことである。

2-2) 異文化看護モデルについて触れていない (図 2)

2-3) 様々な国々のケースを取り上げた教科書（ラテンアメリカ 31% アジア 26% アフリカ 19% など）ではあるが日本人の例は一件しかなかった。

以上の点に注意しながら、異文化看護に関する基本的知識を身につけられる英語リーディング教材を目指すこととした。アジアを中心に日本を舞台とするケーススタディを盛り込み日本人学習者向けになるようにした。

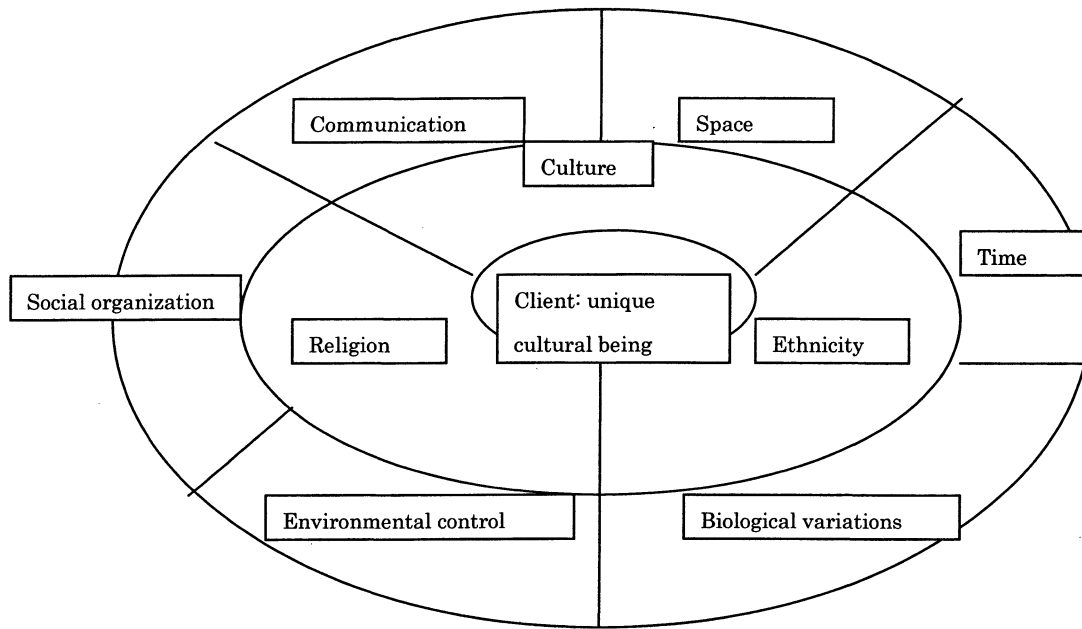


図 2 Giger and Davidhizar's Transcultural Assessment Model

3 パイロット版の作成と実践

15年度の授業実践で使用した教材をもとに日本人学生用のための教材を作成する。その準備として15年度は16年度学生に使用するパイロット版を作成した。15年度に使用した教科書の構成をヒントにしなが、内容は上記の問題点を考慮に入れて、書き換えた。またGiger, Davidhizarのモデル(図2)の外側の枠にある、異文化看護の基本的コンセプトである、

- ・ Communication (コミュニケーション)
- ・ Space (空間)
- ・ Social organization (社会的組織)
- ・ Time (時間)
- ・ Environmental control (環境による支配)
- ・ Biological variations (生物学的相違)

を柱にそれぞれの項目にあてはまるケーススタディを、2~3ずつ執筆し、解説を加えた。基本編・応用編に分け教材を開発し、学生の動機づけの効果も期待してケーススタディの舞台は日本が中心となるように編集した。これに解説を加えた、後半は応用編として異文化看護関連の雑誌から基礎的知識を問う内容の記事を選びパイロット版のテキストに含めた。基礎編で養った知識を生かして、応用編では、アカデミックリーディングにも対応できるような力をつけることとした。理解を深めるため、内容を補足説明するイラストを加えた。

15年度のアメリカ研修では、歴史的背景、移民の割合など、日本とは比べようもないほど多様で様々な文化がSalad Bowlと呼ばれるとおり混在していることがわかった。それだけにアメリカでは異文化看護への取り組みは非常に重要な意味を持っており、それに付随して教材・資料などは図書館に豊富に完備されていた。パイロット版に加える appendix としてアメリカ研修の中でも、日本の学生に伝えたい経験・情報を読み物にまとめた。

- ・ ミドルスクール (5, 6, 7, 8 年生が在籍) の保健室見学, および養護教員, カウンセラーへ

のインタビューこの地区が抱える医療・保健上の諸問題について学んだ。貧困家庭の子供の健康問題、特に虫歯が深刻であるとのことである。性教育・煙害教育・麻薬に関する教育が積極的に行われており、保健室にはそれらの問題に関する子供向けのカラフルなリーフレットが山積みされていた。オープンに問題を子供たちと語り合いながら深刻化を防ぐという姿勢が見られた。避妊具が保健室に置かれており希望する子供には渡していると笑顔で養護教諭は語っていた。公立学校内でも貧富の差、人種の多様性、価値観の違いなどが浮き彫りになった。

- ・シアトル・パシフィック・ユニバーシティ (SPU) での研修

カリキュラムに組み込まれている異文化看護を担当する教授・およびコスタリカでの研修を終えた、異文化看護を履修する学生6人からシアトルにおける異文化看護の様子をうかがった。東洋医学が認められつつあり代替医療についての勉強が必要なこと、スパニッシュ系患者の増加に伴ってその文化をよく知ることの意義、ホモセクシュアル患者の扱いなどさまざまな話題があがった。コスタリカの文化・風習などを前もって知っておくことが現地で人々と交流する上で非常に役立つということであった。異文化看護担当教授からは、異文化というよりも多様化した文化というとらえ方で教材を収集すべきで、異国文化よりもまず日本国内でも身近にある異文化を見だしそこから発展させていくことが出発地点である、とのアドバイスを受けた。

- ・ワシントン州軍人病院での研修

マイノリティスタッフのための異文化看護教育プログラム・マイノリティ患者のための異文化看護マニュアルなどが整備されていた。

考察

本研究は英語能力をのばすことを目標とする看護学生のための教材開発およびその実践研究である。16年度の英語読解の授業が始まり学生に看護と異文化を結びつけるべく、異文化看護に関する基本的な内容の教材を提供しているが、英語学習を通して、異文化看護に対する理解が深まることを大いに期待している。異文化理解と外国語理解は密接な関わり合いがあるため、二つを結びつけることで英語力のアップにつながることを予測できる。

今日、日本の国際化が進み異なる文化を背景に持つ人々への対応の仕方に最新の注意が払われなくてはならなくなる。それと同時に世界における共通言語である英語で対応する機会も多くなっていくと考えられる。異文化看護知識と確かな英語力はこれからの時代を生きる看護職に不可欠なものになっていくことは言うまでもない。既存の英語教科書で不足していた点を補足する目的でこの教材開発を進めていく。

基本的英語力を基本的看護知識で学ぶ English for General Nursing Purposes(EGNP)から実践的な英語力で専門分野を学習する English for Specific Purposes(ESP)への橋渡しとなるような教材開発・授業実践を、英語教材研究会の参加・専門家へのインタビューなどを通して続けていきたい。

文献

- 1) 成沢和子. 四年生看護教育における英語教育の現状と問題点. 看護教育 2003; 44(12) p. 1080-8.
- 2) 渡邊容子. 臨床看護婦の英語の必要分析. The Language Teacher 1998; 22(7): 29-37.
- 3) 山本淳子. 異文化看護学を看護専門教育に取り入れる意義. Annual Report of

JACET-SIGon ESP 2003; 5: 24-30.

- 4) Gropper, C.R. Culture and the Clinical Encounter. Yarmouth: Intercultural Press, Inc, 1996.
- 5) Giger J.N, Davidhizar R.E. Transcultural Nursing. St. Louis : Mosby, 1999.

Appendix

Transcultural Nursing Quizzes T(True) or F(False)?

1. By the middle of this century, members of minority groups will comprise the majority of Americans.
2. Today, the United States is a “melting pot” in which immigrants discard their cultural traditions in order to assimilate. discard --- 捨てる assimilate---同化する とけ込む
3. About 14 percent of the U.S. population speaks a language other than English at home.
4. Culture is a universal phenomenon among humans.
5. An etic perspective describes the point of view of someone who is a member of a cultural group. etic perspective---客観的な見方 (アウトサイドから見ること)
6. People who have emigrated from other countries and speak English often do not follow traditional customs. emigrate from~---~移住する
7. In a holistic belief system, people believe that supernatural forces influence health and illness. holistic---心身一体的 supernatural---超自然的の
8. Cultural relativism is the perspective that other ways of doing things are different but equally valid, and in some cases, may be superior. Cultural relativism---文化的相対主義
9. A person whose health belief system is magic or religious or holistic often goes to a hospital as a last resort. last resort---最後の手段
10. Limiting the number of visitors and restricting visiting hours is an example of cultural blindness.
11. Transcultural nursing is a synthesis of concepts from anthropology, sociology, biology and nursing.
12. The behavior of caring does not exist in all human cultures.
13. Patients should be prohibited from wearing sacred symbols during diagnostic or therapeutic procedures.
14. Self-care is not an important value in all cultures. self-care---自分の面倒を自分で見る
15. It is culturally acceptable for either male or female nursing staff members to care for Muslim patients.
16. It is appropriate to tell a patient that he or she is dying regardless of his or her cultural background.
17. Coining is a form of dermabrasion used in some Asian cultures. Coining---コインをこすりつける dermabrasion---皮膚剥離 ひふはくり (術)
18. An important part of cultural assessment is to determine a patient’s basic beliefs about health and disease.
19. Superficial knowledge about various cultures can lead to stereotyping.

20. New graduates and culturally diverse co-workers can be an important source for cross-cultural information.